

県都デザイン戦略 論点整理

I 基本的な考え方

福井城をまちづくりの礎とし、戦後、全国に先駆けた都市計画によって、豊かなインフラ・ストックを形成

これまでのまちづくりによる特長の伸長と、課題の解決に向け、長期的視点で都市空間を再構築

【県都の特長（課題）】

1. 堀（福井城址）を中心に、養浩館、北の庄城址、愛宕坂などの歴史資源が点在
 （課題）近代的な都市インフラ整備と引き換えに、地下に埋もれた歴史資源
 城址周辺の県・市庁舎を含む建造物の建替時期の到来（2050年まで）
2. 駅を中心に、歩ける範囲に、行政・商業機能がコンパクトに集積
 東西・南北に延びる広幅員道路など、豊かな近代都市インフラ
 （課題）まちなかの緑の不足、景観の不統一、高い自動車分担率
3. 貴重な生態系を残すまちなかの自然と水辺、足羽山・足羽川
 （課題）足羽山、足羽川等の眺望・風景、文化等の活用

上記を踏まえた論点

1. “埋もれた”歴史・文化の掘り起こしとまちづくりへの活用
 - （1）城址と中央公園のリ・デザイン
 - （2）城址・公園周辺の街区の再編
 - （3）貴重な歴史遺産の保全・活用
2. 県都の玄関口、交通システムの総合デザイン
 - （1）県都の玄関口の再設計、道路や街並みなどの空間デザイン
 - （2）人や環境にやさしい交通ネットワーク
3. まちなかの自然（足羽山・足羽川）の活用、緑や水を活かしたまちづくり
 - （1）足羽山、足羽川の自然・景観の保全
 - （2）文化と水辺の空間としての足羽山、足羽川の活用

（検討の前提）

- ・ 県都として、福井県の魅力（食、ものづくり、健康等）を象徴する空間づくり
- ・ 市内各地、各市町のまちづくりへの波及効果
- ・ 2050年の将来像を描き、早期に取り組むべきプロジェクトについては、国体開催や北陸新幹線開業という具体的な目標時期までに実現

Ⅱ 県都デザインの論点（枠内は委員指摘の要旨）

1. “埋もれた” 歴史・文化の掘り起こしとまちづくりへの活用

（1）城址と中央公園のリ・デザイン

歴史を象徴（遺構の活用、復元など）し、緑が溢れ、県民・市民が憩う空間の形成

- ・ 県、市庁舎の移転・再配置を想定し、城址と中央公園を一体的に再設計
- ・ 今年度解体する県民会館跡地の利活用を端緒に、市民とともに将来像を考える機会をもちながら、再整備を段階的に実施

- ・ どのような活動をする場とするのか、城址と中央公園という二つの歴史をどのような形で未来に引き継ぐか検討することが必要ではないか。
- ・ 石垣、堀、御座所や、櫓、御門など、埋もれた歴史の活用の方法について考える必要があるのではないか。
- ・ 現代の御座所など、場の歴史的な意味合いを解釈し、次の世代につなげるデザインが考えられるのではないか。
- ・ 歴史イメージを大事にすること、静かで水も緑もある場所とすることなど、どのようなコンセプトがふさわしい場所かを考える必要がある。

（2）城址・公園周辺の街区の再編

城址から福井駅や大通りへつながる周辺街区の再構築

- ・ 城址の周辺においても、建物が更新時期を迎えることを想定し、街区全体での再編を誘導

- ・ 建物の更新時期に合わせた再開発など、街区全体での空間の再構築が必要ではないか。
- ・ いろいろな形で変化が起こり、うまく再生されるイメージを生むためのキーワードを探ることが必要ではないか。
- ・ 歴史的なイメージと、モダンなイメージと、対比的に見せる部分があってもいいのではないか。

(3) 貴重な歴史遺産の保全・活用

歴史的建造物のリノベーション、歴史を感じさせる通りの形成など、 歴史遺産を活かすまちづくり

- ・多様な歴史を将来へとつなぐため、福井地方裁判所や三井住友信託銀行（旧福井信託銀行）など、歴史的建造物を保存・活用
- ・あわせて、歴史拠点の周辺に位置する民間施設・駐車場などについて、「歴史」の雰囲気配慮したデザインへと誘導

- ・今も残っている歴史的建造物、史跡等をどう保存し、どう活用するか。
- ・それらを結んで歩けるネットワークを形成してはどうか。
- ・お堀周辺は、シンボリックな趣を醸し出す通りとしてはどうか。
- ・町や通りを、歴史を感じさせる名称にしてはどうか。

2. 県都の玄関口、交通システムの総合デザイン

(1) 県都の玄関口の再設計、まちの顔となる空間の形成

緑豊かな駅前広場、都市景観の基幹軸（シンボル軸）など、まちの顔となる玄関口の形成

- ・まちの第一印象を決める福井駅の東西広場や、中心市街地の東西・南北の大通りの景観軸をデザイン
- ・街路樹、街灯、電停など公共デザインの調和、民間の景観づくりを誘導

- ・まちの第一印象を決める顔。県都ビジョンを象徴する空間、起爆剤として駅前があるのではないか。
- ・周りに住みたい、働きたい、商売したいという動きが出てくるような人を呼び寄せるデザイン（景観、建築物等）が必要ではないか。
- ・駅から、城址、中央大通り、商店街などに向かって、人の流れ・動きがつながることが必要ではないか。
- ・全国の都市は、駅前の交通機能、駅裏のマンションなど、構成要素が同じ。福井の県都は何を目指すのかにより、独自の要素が必要となる。
- ・見て楽しめるまち、見せ場のあるまちをつくらないと企業や人も来てくれないのではないか。
- ・シンボル軸が結節する大名町交差点は、顔となる空間になるよう、角地の工夫があっても良いのではないか。
- ・街路灯、街路樹など、全体が統一されるコンセプトと、デザインを調整する体制が必要ではないか。
- ・まちなかのデザインなどに、福井のものづくりを活かせないか。

(2) 人や環境にやさしい交通ネットワーク

歩行者・自転車交通や南北・東西交通など、人や環境にやさしい交通システム整備と、都市インフラの再配分

- ・子育て世代や高齢者など、多様な歩行者のための通りのデザインやエリアの設定、自転車利用の促進
- ・鉄道等南北に整備された交通インフラの有効活用、東西方向の交通のあり方

- ・福井は建物に対して道路の幅員が広く、まちをどうしたいかによって、道路空間は組み替えられるのではないか。
- ・地形はフラットで道も広く、自転車専用道も作りやすいのではないか。

3. まちなかの自然（足羽山・足羽川）の活用、緑や水を活かしたまちづくり

(1) 足羽山、足羽川の自然・景観の保全

足羽山、足羽川の自然の保全、四季を通じて楽しめる景観の形成
周辺への緑のつながりの拡大

- ・足羽山、足羽川の桜、アジサイなど自然・景観が映える空間形成
- ・まちなかからの眺望や周辺景観の改善・誘導

- ・足羽山、足羽川のエリアは、福井が環境をどう見ているか、シンボルになる場所ではないか。
- ・まちなかから川の気配が感じられるとか、川沿いに出たとき、広がるパノラマを見せるなど、見せ方の工夫が必要ではないか。

(2) 文化と憩いの空間としての足羽山、足羽川の活用

愛宕坂や浜町界隈などの文化空間や、足羽川の水辺空間を活かした、
憩い楽しむ場の形成

- ・愛宕坂や浜町、河川敷を、市民が集まり、芸術・文化、ボートなどを楽しむ活動の場として活用

- ・足羽山にアートを育て、駅前商店街のアート・イベント等とつながりが生まれるとおもしろいのではないか。
- ・イベントで三国湊とつなげるなど、さまざまな社会実験を実施してはどうか。